

頭脳と筋肉と魔女と色々

せきな

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔々

いろんなところにいろんな人たちがいましたよね。  
では最近は?

今でも世界にはいろんなところにいろんな人たちがいるんですよ

目

次

むかしむかし

あるところつてどこだ

6 1

むかしむかし

『昔々、あるところに――』

こんな風に始まる物語は一体いくつあるのでしょうか  
きっと国の数よりあるのでしょうかから、

それはそれはとてつもない量になるのでしょうか

まあそんなことはどうでも良いのでした

何故つて？それは

これから始まるのは

昔々のお話なんかじやなく  
随分と新しいお話なのですから  
ですから語り始めはこういたしましょう  
『つい最近、この辺りに――』

.....

『魔女が住み始めたらしいぞ。』

ある春の日の放課後。漸く新しくなったクラスにも慣れ始め、新しくできた友人達を部活に送つたあと帰り支度をしている時の出来事だつた。

机をバンと叩きながら、別に珍しくはない真面目な顔で友人が言う。彼との付き合いももう随分と長いものになつたから、最近では鼻で笑つて流してしまいがちだつた。しかし、こう真剣な表情で言われると私も本気で返さなくてはならない。

『ウケる。』

心を、親愛を山盛り、それとスペースにちよつとの嘲笑を込めて彼に言い放つ。完璧だ。これで彼に私の思いが届かないはずがなかつ

た。

『笑い事じゃねえ。』

駄目だつたみたいだ。脳が筋肉で出来ているどころか、脳が存在せず筋肉が独立して行動しているような彼には【言葉】を理解するのは大変難しい事であつたようだ。

『本気で笑うことができたらなんて幸いなことか。今時では子供にも言わないようなセリフだけど、さて。僕ちゃんは一体何歳になつたのかな?』

『つい先日、ムキムキの17歳になつた。』

決して浅くはない溜息をついて尋ねると、彼は自慢気に右腕を曲げキメ顔で言い放つた。

『おめでとう、本当にめでたいよ。君の頭は。』

軽く三度、ペちペちと手を打ち鳴らして言う。

『ああ、ありがとう。やはりお前からの祝いの言葉は何度聞いても嬉しいもんだな。』

『君は聴覚に深刻な問題を抱えているようだね。いや、深刻なのは脑の方か? いい加減頭を使うことをした方がいいぞ。いつも君のテストは壊滅的じやないか。』

『テストなんぞで何が測れる? 人生で必要なのは実際に働くこの体だ。』

『いくら動けても考えなければ意味ないだろ。頭を使え、頭を。』

『そんな屁理屈ばかり言つてゐるからお前は大きくなれないんだ。体を使え、美姫。』

『し、身長は関係ないだろう。知恵はいつだって人を助けるものだ。それに体を動かすのだって脳で考えてからだぞ。いや、君の場合は違つたか？』

こんなやりとりを一体何度しただろう。彼が花のような笑顔を浮かべる小さな天使だったのは遠い昔のお話。そんな彼もいつのまにか人かゴリラか遠目ではわからない程にまで成長した。いや、してしまつた。あの頃の陽太は本当に可愛らしかつたと、思わず遠くを死んだ目で眺めてしまふのも仕方のないことだつた。

『話がズレているぞ、魔女だ魔女。』

ゴリラに指摘されるのは腹立たしく感じるものがあつたが、躊躇をするのも飼育員の務め。仕方がない、乗つてやろう。

『そんなものはいないよ。』

乗らなかつた。駆け込み乗車は危険だから仕方ない。  
『いるんだ。』

私が話をぶつた切つたにも関わらず彼は淡々とそう口にする。彼は非常に残念なことにシンプルに頭が悪い。しかし頑固というわけではなかつた。ここまで曲げないのは何かあるのかと思い言葉を吐く。

『何故そう言い切れる？』

私の声に彼はゆっくりと瞼を閉じて深く息を吸い込んだ。意外と睫毛が長く、天使だつた頃の名残があるんだな等とどうでもいいことを思つていると彼が不敵に笑つて言つた。

『教えてくれんだよ、俺の短母指外転筋が。』

教室に斜陽が差し込む。ついこの前までは身を切るような寒さに震えていたとは思えないほどに、柔らかく暖かい光が私の目を眩ませた。

決してこの馬鹿と話していたから目眩がしたとかではないと思いたい。

永遠にも感じられた沈黙の後、私は出来るだけ早口で彼に告げた。  
『本当に申し訳ないが急に随分と頭が痛くなってきたから私は帰らせてもらうよ。すまないね。』

そそくさとカバンに教科書やペンケースを投げ込んで肩にかけ、目の前の敬虔な筋肉教信者と目を合わせず出来るだけ迂回するように出口へと向かう。

『そうは問屋がなんとやら。』

しかし回り込まれてしまった。

いや、回り込まれただけだつたならどれだけ良かつたか。

視点がぐんと上がり、ふわりと体が浮かぶ。

わあ、私飛んでる！いや違うそうじやない、担がれてる。

【お米様抱っこ】というやつだ。

『見えなかつた。』

私が知覚できたのは、私の髪を揺らす風だけだつた。

気がつけば私はゴリラの肩の上。スカートなんだぞやめろ、降ろせ。

『無駄無駄。体を鍛えていないから抜けられないだろ。逃れたくば今からでも筋トレをするんだな。』

ニヤニヤとしながら馬鹿が言う。まさかこのまま移動するつもりなのだろうか。現代に残る辱めの中でも上位にランクインするぞこれは。

『筋肉至上主義者め、今に見てろ。』

私の吐いた精一杯の捨てセリフはやはり彼には届かなかつた。じたばたと動くのは体力を使うのでとうにやめていた。

『さて、魔女に会いに行くとしようぜ。』

そう言つた彼の顔は無邪氣で、少しだけ幼く見えた。

あるところつてどこだ

魔女がいるという話を聞きつけた二人の子供がおりました。

一人は考えることに長けた女の子

一人は動くことに長けた男の子

なんて事はない、ただの怖いもの見たさだったのかもしれません。  
彼と彼女は魔女を探しに行くことにしました。

二人はいつも一緒ですから、共に行動することも珍しくはありません。

このお話が動き出したのは、きっとこの時点になるのでしょうかね。

.....

『降ろせ、私を降ろしてくれ。運んでくれてありがとう、でも私の心の  
安寧から最寄りの降車駅はここなんだ。』

『そうは問屋が』

『降ろせ。卸さないのではなく、降ろせ。』

『降ろすのに降ろさないとは、美姫は難しいことを言うな。』  
『こういう時に話が伝わらないのは心から腹立たしいよ。考えること  
をやめた人間は獣だぞ。お前のことだ、陽太。』

『獣か…かっこいいな。』

『待つてろ、すぐに駆逐してやる。』

校内の皆様、ご機嫌よう。白雪美姫でござります。今私はゴリラに  
担がれて移動しております。レディの間では当然のことですわ。

あらあら、そんなにじろじろと見つめられては恥ずかしくってよ？  
おい何見とんねんお前ら、見せ物ちやうぞこらあ。

取り乱しました、白雪美姫です。

只今の時間は放課後、帰路に着こうとする学生で溢れかえる廊下を大柄な男に担がれながら進んでいます。

私とこの男が一緒にいる事は決して珍しくはないが、流石にこの状態を見たのは初めてだろうから目を丸くしている。明日から休日だし暫しのお別れをしておこうと小さく手を振る。バイバイみんな、また会える日まで。

『楽しみだな、美姫。魔女だぞ魔女。』

『ああ、愉しみで仕方がないよ。君が現実を目の当たりにすることがね。』

『今のうちに挨拶を考えておかなくちゃいかんな。』

そう言つて私の皮肉を無視し、本当に楽しそうに笑う彼の姿にまた溜息をつく。彼の突発的思いつきでの行動は私にとつては慣れたものだ。そしてこの長い付き合いの中で、私がどんなに抵抗をしても全く意味を成さないという事も私は理解していた。

だからといつてこの状況はよろしくない。先程担任の先生とそれ違つたが、『…白雪が酔わないように配慮するんだぞ。』という一言を残し去つていった。お前の配慮が間違つていると指摘したかった。『とりあえず降ろしてくれ、もう諦めた。君についていくから、頼む。…流石に恥ずかしいんだ。』

『おお、ついに美姫もその気になつたか！やはり自分の力で成し遂げるのが一番だからな！』

『少し黙つてくれ、君の声はこの距離だと私の鼓膜を破りかねない。』  
『照れるな照れるな。』

『本心だよ。本当に、心から思つてる。』

私もこの担がれている状況に慣れてしまいたくはなかつたが、順応してきたのかいつも通りのやりとりを始めてしまう。

彼がゆっくり優しく肩から私を降ろす。なぜここで紳士的なのか。

いや、違う。紳士的な人間は人を肩に担いだりはしなかつた。私もずいぶん毒されている。

ああ地面に足が着くことがこれほど喜ばしいことだつたとは。一息ついて彼に問う。

『そもそもお前は魔女がどこにいるかわかつてているのか？』

『問題ない。』

『何故そう言い切れる？』

自信ありげに不敵な、いや不適切な笑みを浮かべた筋肉に疑問を投げかける。

『簡単だ。腹横筋の話に耳を傾けて進めば望みの場所へと繋がつくる。』

『そいつあすげえ。凄すぎて涙が出るぜ。』

視界が滲んで来た気がした。大きく息を吸つてー、吐いてー。この世に絶望した人間はきっとこんな溜息を日常的に吐いているに違いない。私もこの馬鹿とのやりとりに大きな絶望を見ているから仲間だな、よろしく頼む。

すたすたと早足で歩く馬鹿に追いつこうともせず、私はのろのろと彼の背を追いかけた。

『全ては筋肉の導きのままに、だろう？』

・・・

学校から歩くこと凡そ20分程度だろうか。こいつは筋肉馬鹿なのに加え体力も化け物級であるから私の息が切れているのは当然のことだつた。

『…それで、ここが魔女の家だと？』

『間違いない：俺の前鋸筋がそう告げている。』

『腹横筋の話に耳を傾けていたお前はどこへ行つたんだ？迷子か？』

私たちはちょうど、ある家の前までたどり着いたところだつた。

高校の在する市街地を抜け、途中にある人通りの少ない長い田舎道をひたすら歩くと小川が流れているところに出る。

今度はその小川に沿つて道を下つて行くと広い草原が見えてくる。色とりどりの花が無秩序に咲き乱れるその草原の奥、少し小高くなつたところにぽつんと家が一軒建つていた。

この辺りでは珍しい素焼きのレンガの壁に天然スレートの屋根で、凝つた装飾のある白い小さめの両開き窓が映えている。

家の前の庭には、これまた家の周りを取り囲む草原のように様々な植物が見えた。

どこからどう見ても隠れ家的カフェ或いは雑貨屋の相貌をしている。今時の女子高生なら押さえておいて、放課後に集うのにうつつけのお店となること間違いなしだろう。

『絶対こんなところに魔女はいないぞ。きつといるのは若くてゆるふわなお姉さん店長か、時たま愛嬌のある笑みやユーモアを見せる渋めのマスターのオジサマだ。私の灰色の脳細胞がそう告げている。』

『本当にお前は筋肉への信仰が足りんな。それでどうやつて今まで生きてこられたんだ？』

『お前は筋肉への信仰でどうやつて生きて來たんだ。ブーメランつて知つてるか？本来狩猟用の武器だつたそれはお前を簡単にやつてしまふぞ？』

『鍛えている俺には効かんよ。さて行こう。』

『違う、そうじやない。物理じやないんだ。そして待て、犬でも待てぐらいでできるぞ。』

『頼もう！』

『待てと言うのに！いや本当に知らんぞ私は！』

威勢の良い声とは反対にちゃんとノックを鳴らす彼の姿は非常

に滑稽だ。

しかし思い切りが良すぎるこいつに非難の声を上げているとすぐにガチャリと音がしてゆっくりとドアが開いた。